

## 原爆で家族を失って

奥村 アヤ子（当時八歳）

当時、八歳。城山国民学校三年生。爆心から八〇〇メートルの城山町で被爆。父母、兄弟死亡。自分だけが生き残る。現在、被爆者の店に勤務している。

私は、小学校三年生の時、爆心地から八〇〇メートル離れた城山町で被爆しました。八歳でした。その日、家族八人は消えてしまったのです。鉄道の駅や港からも離れ、繁華街からも遠く、近くに大きな工場もない緑に囲まれた城山町は、安全なところだと思われていました。そのため疎開してきて、亡くなった方も少なくありません。

当時の城山町は、城山小学校の近くには市営住宅があり、その西には田圃や山が広がる静かな所でした。私が住んでいた部落は、十二、三軒から成っており、「おじちゃん」と声をかけると、「オーイ」と返ってくるのどかな隣組でした。みんな家族のように、のんびりと暮らしていました。

八月九日十一時二分、原爆が投下されて、部落も家も人も、一瞬にして消えました。原爆は、松山町の上空五〇〇メートルで爆発したのです。強烈な閃光と鼓膜が破れそうな爆発音、それにつづく熱線と爆風で、浦上一帯はたちまち完全に破壊され、火の海となったのです。

八月九日の朝、父と兄は仕事に出かけました。空襲警報が出たので、私は母や弟たちと一緒に防空壕に避難しましたが、やがて解除になったので、母と弟たちは自宅へ帰りました。私は、自宅から少し離れた高台にあった友達の家遊びに行きました。私たちは、大きな柿の木の下で、遊んでいました。

爆心地にかなり近い距離ですが、私は爆発音は聞いていないし、原子雲も見ません。ピカーッともものすごい閃光に、私はとっさに地面に伏せたと思います。気がついてみると、一緒に遊んでいた友達は爆風で飛ばされたのか、近くにはいませんでした。

友達の家は崩れていました。私はあわてて長い石段を下り、自宅へと急ぎました。遊びに行くときには家があり畠があったのに、一軒の家もありませんでした。

叔母の家もなくなっているし、森山さんの馬は死んでいるし、人は死んでいるし、私は泣きながら家の方へ向かいました。

まだ小学校三年生の私は、何が起こったのかを理解することもできませんでした。

私は隣組の防空壕を思い出して、そちらへ向かいました。そうしたらすぐに、四歳の弟に逢いました。弟は火傷をして、泣いていました。私はどうしてやることもできず、母ちゃんを呼んでくるから、と弟を残して、母を捜しに、今来た道に戻りました。途中で、近所のおばさんから妹がキンカンの木の下にいると知らされました。急いで行ってみると、元気だった妹は顔は腫れ、変わり果てた姿で動かすこともできませんでした。私は妹に何もしてやれませんでした。

とにかく母を捜そうと思いました。母は、よく農作業の手伝いに行っていたので、畠や田圃と母が行きそうな所へ行ってみましたが、母には逢えませんでした。

八月九日の夜は、弟と近所の人たちと、隣組の防空壕で過ごしました。

ほかの家族は、「よう生きとったね」「元気やったね」と再会を喜びあっているのに、私のところはどれほど待っても、父も母も、兄弟の誰も帰ってきませんでした。

私たちは家を新築するまでは、伯母の敷地内の離れを借りて住んでいました。その伯母は、原爆が投下されたとき城山小学校の近くの田圃で草取りをしていたそうです。全身火傷で帰ってきました。重症でも帰ってきたので、伯母の家族は六人全員顔を会わせることができたのです。

重症でもいい、どんな姿でもいい、一目でもみんなと会えたらどんなにか心が安らいだらろうと思います。でも、誰も帰ってきませんでした。

—ここまでは覚えているのですが、このあと私の記憶はとぎれてしまうのです。原爆のショックなのか、弟と二人っきりになって、家族全員を失った悲しみのせいか、私は記憶喪失になってしまったのです。しばらくの間、伯母や従姉妹たちと過ごしたということですが、全く覚えていないのです。

一五年ぶりに会った従姉妹から、当時のことを聞きました。重症だった伯母はやがて亡くなるのですが、私は伯母さんのそばから離れず、「伯母さん死なないで。死なないで。」と泣いていたそうです。

しかし、伯母は亡くなり、私と弟は、それまで一度も行ったことのない遠い親戚に引き取られることになりました。長崎を離れるのがよほどいやだったので、田舎へ行くところから私の記憶は戻ります。

浦上川にかかる大橋を渡り、不安と悲しみの中で、私たちは田舎へ連れて行かれました。

城山小学校の近くの市営住宅は、全滅でした。道路だけが残っていました。真っ黒に焼かれた死体が転がっていました。美しかった浦上川—子どもたちが魚を釣ったり泳いだりしていた浦上川は、原爆で身体を焼かれた人たちが水を求めて集まり、折り重なるように死体で一杯でした。

親戚へ引き取られてからも、原爆の記憶を失っていた私は、城山へ行けば父

や母たちに会えると思い、田舎から三時間もかけて、家族を捜しにトボトボと歩いて、何度も何度も城山へやってきたのですが、その都度つれ戻されたのでした。

そのうち、城山へゆくのを諦め、弟を連れて病院通いがはじまりました。

弟は、かなりひどい火傷をしていました。その弟を私が病院へ連れて行くのですが、私は小さかったので、「おんぶ」してやることができず、手をつないで、ゆっくりゆっくり歩いて通いました。母がいたら「おんぶ」してもらえたらうに、母がいたら「痛い」とかいったらうに、母がいたら精一杯甘えることも出来たらうに、四歳の弟は身体中の痛みを我慢して、病院へ通ったのでした。そして、原爆から二カ月後の十月二十三日、地獄のような苦しみだけを背負って、亡くなりました。助からない命なら、即死の方がよかったのにとさえ思いました。じーっと我慢していた弟の姿が、脛に焼きついて離れません。

私は外で遊んでいて被爆したので、きっと多量の放射線を浴びたのだと思います。髪の毛は抜けてしまい、歯ぐきからは出血するし、身体全体がだるく、具合が悪かったのですが、病院には行かせてもらえませんでした。その当時は、「原爆病」ということは分からなかったのです。

身体が苦しくても相談する相手もいなくて、親がいないということがどんなに悲しくて苦しいことか一言では言い表わせません。田舎の生活に慣れるだけでも大変でした。原爆は、私の人生を変えたのです。

四十六年間、私は原爆の話はできず、原爆から逃げていましたが、私の家族のことを少しでも書き残したくて、長崎被災協が被爆体験集『あすへの遺産』を企画したときに一ページほど書かせてもらったり、姉の友人と逢い、それまで分からなかった私の家族のこと、特に姉のことなどを聞き、改めて原爆の惨さを知る中で、今は原爆と向き合う気持で、当時のこと、私の思いなどを、修学旅行の子どもたちに少しずつ話すようになりました。

父は、山の中腹で亡くなっていたとか。あのときあれだけ捜しても分からなかった母は、倒壊した家屋の下敷きとなって、二歳になる弟をかばうようにして亡くなっていたといえます。即死ではなかったのに、助けてくれる人もなく、息絶えたのでしょう。

兄の消息は、いまだに分かりません。あれから四〇年過ぎたいまでも、兄が死んだとは思いたくないのです。

毎月命日がくると、田舎から城山町の墓地に一人で歩いてきていました。もしかしたら兄と逢えるのではないかとお墓で兄を待っていました。

新聞や看板に「徳永」の文字を見るたびに、その下に兄の名前を捜していました。兄は、私の心の支えでした。

被爆から四十六年目に、三菱兵器製作所の慰霊祭があることを知りました。

父も兄も、三菱兵器製作所で働いていたのです。慰霊祭に参加して、死没者の名前を捜しました。そこに父の名前はありましたが、兄の名前はありませんでした。いまだに、兄の最期は知るできません。

私の家族は、あっちこっちと別々の所で亡くなり、その上、着衣も焼け、裸同然の姿で死んでいますので、遺骨のありかもわかりません。私は、それぞれが亡くなった場所の土を頂いてきて、新しい下着を添えて、城山の徳永の墓に納めました。四十六年ぶりに家族は揃ってこのお墓に眠ることができたのです。

一九九五年（平成七年）